cobas pro〈ｃ503/e801〉の導入効果

検査技師を臨床の場へより近づけるために

◎吉田 元治[1)]、黒田 舞子[1)]、清水 楓梨[1)]
大阪府立中河内救命救急センター[1)]

【はじめに】当センターの施設特性上、生化学及び免疫学的検査は、24 時間稼働させる必要があり cobas6000〈c501/e601〉にて運用していた。導入当初は操作性や連結機のメリットを生かした運用にすることで TAT の短縮やメンテナンス等の煩雑さが減少した。しかし検査技師数の減少や測定項目数の増加により、日常メンテナンスに一部支障が生じ始めた。そこで後継機種である cobas pro〈c503/e801〉の検討を行い、導入に至った。導入から数か月経過したので使用感及び特徴を報告する。

【機器の特徴】2019 年 9 に発売された同機種は、ハイスピード・高品質・効率性はもちろんのこと、臨床に直結しない間接的な業務の一部を装置が代行する機能（オートメンテナンス）があり、当施設の悩みを解消してくれた。

【生化学分析装置：c503】１回／週、約１時間機器を止めて実施していたメンテナンスを稼働日ごとに分散することでダウンタイムが大幅に減少した。また電解質測定が別ユニットになったことで比色測定を妨げず、生化学検査項目の処理能力が向上した。また検体プローブを超音波洗浄することにより、キャリーオーバーのリスクも低減した。

【免疫分析装置：e801】HIV combi の測定時間が 27 分かかり TAT 短縮の限界であったが、試薬の変更により他の免疫項目同様に 18 分で結果報告ができるようになった。

【共通事項】分析機を止めることなく、測定中の試薬カセット投入が可能になったこと、また新たなキャリブレーション補正方法により、キャリブレーション試料の測定頻度が減少した。また RFID による試薬管理機能のためすべての情報が機器上で管理でき、試薬管理を含めたメンテナンス時間が大幅に短縮した。

【まとめ】臨床の場へ出向くには、人員の増加や業務内容の見直しなど、他部門への働きかけなどを実施する必要がある。しかし機器に費やす時間を可能な限り短縮することでその時間を割くことができ、またタスクシフトの推進にも繋がると考えられる。前述した通り、ヒトが実施していた作業を機器のオートメーションに委ねることができる cobas pro は、我々検査技師をより患者に近づける可能性のある機器であると考える。

連絡先 06-6785-6166